コラム

私と読書

中田金四郎

江上 剛氏とは、営業店の渉外担当者時代に一緒に仕事をした仲である。

銀行を早期退職(2003年3月)したと聞き、役員一歩前と噂されていたので大変な驚きであった。支店長時代の作品「非情銀行」で作家デビューし、早期退職後は金融・ビジネス界を描く小説を次々と生み出している。

さらに日本振興銀行の社長に就任し、時の人にもなった。この辺のことは「日本崩壊はここから始まった」(ワニブックス新書・840円)に書かれている。

小説は大別すると4つ位に分類されると思う。まず銀行員時代に見聞きしてきた経験から生まれた作品で、「起死回生」や「座礁」「絆」など多くの作品がある。本部中堅幹部、支店長の経験から銀行に働く行員へのメッセージとして「銀行員諸君」(対談)、「会社の外で考えた」などがある。

そして銀行マンとして企業を洞察する「アジア熱風録」、「奇跡のモノづくり」など。さらに銀行創設時の偉大な先輩達を紹介する「我・弁明せず」、「成り上がり」などである。

以下、最近の作品を紹介するので一度、手に取って読まれることを勧めたい。

奇跡のモノづくり」(幻冬舎・1200円)は本間ゴルフ、メルシャン八代工場、山崎研磨工場、コニカミノルタ、クラレ、キッコーマン、沖縄編と取材したモノづくりの現場を分かり易く読者に伝えている。有名なブランド名もあるが、町工場や地場産業が紹介されている。沖縄編の「宮の華」は女性だけで造る抱盛であり酒に強くない人でも飲みたくなる。

「告発の虚塔」(幻冬舎・1600円)は、みずほFGの旧トップ3人が登場し3人の人物像は性格など言い当てているように思われる。みずほＣＢ頭取Ｓのスキャンダルを縦軸に貸し渋りや大手製紙会社が仕掛ける敵対的買収などが横軸に加わりストーリーが進んでいく。

スキャンダルの渦中に居る女子アナが何故Ｓ頭取に近づいたのか、フィクションならではの面白さである。Ｓ頭取に問い質したいことは小説の中で『今回の不倫をどう思っているか? 報道記者と不適切な関係になるのは、頭取として問題ではないか? 女性との密会に社用車を使うのは問題ではないか? 密会の費用を銀行の交際費から落していないのか?』と尋ねる。みずほFGに勤めている行員なら本人に聞きたい事でもあり、一読したくなるのではないでしょうか。

どの作品も江上氏の信念だと思える『現場を大切にする』、『銀行の社会的な使命である信用創造の役割、すなわち虚業でなく実業を支援する』姿勢が貫ぬかれている。（みずほ銀行勤務）

追伸

「人生に七味あり」（徳間書店・1600円）が2012年12月31日初刷りとして好評発売中です。銀行合併を取り上げたこの作品は、主人公中堅幹部行員の行く末を考える人生応援歌になっています。